

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

B U N K A T S U S H I N

2026秋 No.131



茶の湯の伝燈を支える

7月に財団のお茶室で行われた京都の北村美術館の木下収館長の米寿のお茶会で水屋の仕切りをお手伝いされた弊財団の美澤包子理事の一期一会。今もなお現役で楽しいお茶会をして下さるお二人の年齢は、合わせて184歳。共に表千家の茶の湯を担って来られたレジェンドたちです。(2頁に関連記事)

- 北村美術館茶会
- 第12回 あ・うんの数寄講座
茶の湯をさらに楽しむ夏期講習(前半)
- 9月から11月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号
TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212
2026年秋号 No.131 9月1日発行(季刊)

北村美術館茶会



その日は高松地方気象台が梅雨明けを発表して、それまでの暑さがいや増しに感じられた一日でした。

茶会は、さながら、江戸幕府御三家の紀州徳川家に茶頭出仕していた表千家流の茶会と、いつも、歴史や茶道具美術の深い造詣を洒落な文章や語り口で惜しみなく披露してくださる北村美術館館長・木下收先生の講演会と、そして、吉野杉で有名な吉野の山林王北村家の次男、実業家で茶人の北村謹次郎氏が蒐集愛蔵した、三十四件もの重要文化財を含む北村美術館蔵の茶道具展覧会を兼ねたような印象でした。

館長さんの少し早口な京なまりで「今年、私、満八十八歳になりましたンですわ」とのご挨拶に続いて、「夏の茶会は涼しいに尽きます」と、涼しさの演出は寄付に架かった白紙賛の軸から始まりました。

右肩に小さく二行の墨書「涼しさはたぐいも

更に夏山の峯より落る音なしの瀧」の和歌に八十八翁と添えた軸。夏の茶席で墨画ならではの技法で紙面の余白を瀑布に見立てた絵軸をよく拝見しますが、この白紙賛、滝の流れはおろか水しぶきの一つだに無く、文字通りの白紙。言うなれば、この軸いっぱい水の流れが視界を遮るほどの滝で、しかも、この堂々とした流れが水音もたてぬというのです。眼前を真っ白にするほど近い距離で滝音が聞こえないという表現の矛盾した和歌と絵の解釈は難しく、たとえば、肩に痛いほどの水を受けながら一心不乱に経を唱える白装束の修行者が滝壺の中に入り切るとこんな光景だろうかとか、水の形も音も消した「無」は禅の境地かと慣れぬ想像をしたらしました。

作者は幕末の大徳寺四三五大綱宗彦和尚、八十八歳の時の揮毫と伺いました。あれえ、館長さんも八十八歳、さらに、濃茶席の主茶碗「内

北村美術館茶会 會記

時 令和八年七月十二日
於 美藻庵・晴松亭
席主 北村美術館

寄付

床 大綱宗彦筆 白紙賛

涼しさはたぐいも更に夏山の峯より落る音なしの瀧
米翁 大綱

濃茶席

床 岐翁紹偵筆 泉 永正九年季秋下旬

花入 白雲蓋裏琴弦急 花落橋辺波浪香
坐断嶺頭自看取 水流滴下為誰忙
胡銅象耳 ときのもの 紀州徳川家伝来

釜 平九羽釜 古浄元作

風炉 唐銅朝鮮風炉 初代寒雄作

水指 信楽 鬼桶

茶器 金輪寺 利休在判 勿謂軒伝来

茶碗 仕覆 丹地蜀巴 日野間道 紙更紗

茶碗 高麗 彫 三島 銘 内海

出帛紗 嵯峨桐金欄

茶杓 利休作 竹 文叔替筒 真伯状添ウ

建水 本地曲

蓋置 青竹

御茶 猶有斎好 松韻の昔

菓子 したたり 一保堂詰 亀廣永製

菓子器 杉木地片木目板

薄茶席

床 橋本閑雪筆 船鉾画賛

脇 蟬鬢新淡緑將流 雅着涼羅肌肉柔
拉去隣家茅之妹 背人偷拌御船鉾
春日ルリ燈炉 坂本曲斎作

海」の銘を持つ高麗彫三島は謹次郎が自身の米寿茶会に初使いすべく秘蔵していた茶碗と聞いて、今日の茶会に隠されたもう一つの思い、時空を超えたお三方さまの「米寿の揃い踏み」が仄見えて、館長さんのますますのご健勝ご活躍を祈念申し上げます。

惜しくも、八十七歳で他界した謹次郎の米寿茶会には叶わなかったそうですが、嵯峨桐金欄の出帛紗を添えた茶碗の展覧は謹次郎に私淑してやまない館長の審美眼と表現力で「残念の昇華」になりました。もし、謹次郎が親しい数寄者を自邸の四君子苑に招いて米寿の茶会を催したら、この「内海」にどんな道具組があつたのでしょうか。今日のような暑さの最中でなかったら季節の取り合わせは一変したでしょうし、どなたをお招きするかによって北村家のお蔵探しの答も変わってきたことでしょう。

菓子席では夏の京都に欠かせぬ琥珀色の「したたり」が割り削いた杉の木片を清潔に仕上げた菓子皿で供されました。真新しい杉の割肌がほんのり赤みを帯びて、さすが吉野の北村家ならではのあしらいで祇園祭を予告します。

濃茶席の床には「泉」一字の下側に振り分けた七言が二行、二行の四行詩。七言絶句の漢詩が描き出す風景も悠然とした山や雲と眼下を流れる水。一休宗純の子供だとも言われる岐翁紹偵の、律儀な楷書で自然界の景観を動と静に對比させた七言絶句は教訓的な意味合いで迫ってきますが、字や句はあくまで涼やかです。軸の前には格調高い象耳付の胡銅の花入に檜扇のつぼみ・祇園祭りの厄除けの花と白い雁皮が添えられ、侘びの席らしく花数を少なめにひっそり咲いていました。

道具が整いお点前が始まりました。仕覆の紐が解かれ金輪寺茶器から細身の茶杓で茶が掬われます。茶器には利休のケラ判、茶杓の作者は利休と王道の取り合わせ。しかも、この茶器は大層な衣装持ちで他に二つもの「おべべ」を持ち、紙更紗の仕覆は手漉き和紙なればこそその細工で興味深く拝見しました。

続いての薄茶席の床には、山鉾巡行の最後尾を行く船鉾の画賛。右下方から大きく青空を切って巡行にゆれる船鉾の絵は圧巻で、実際の絵の背景は余白のままなのですが、そこはまさに京都の夏空。そして、床柱の小ぶりの手附籠に木槿とこの時期に「祇園すすき」と美称される早生の矢筈芒が遠慮した風情で、船鉾の絵を一層鮮やかに浮立たせていました。

主茶碗も祇園祭の時期に毎年、楽家より表千家に届けられるしきたりの夏茶碗、団扇を模した干菓子も唐花木瓜、左三ツ巴の八坂神社神紋の焼印の下にひと刷毛の波が青く清々しい煎餅と、幾つもの祇園さん話が広がりました。

しかし話は一転、遠い異国の遠い時代にワープして、建水は青銅ルリスタン・古代イラン遊牧民時代の発掘品、蓋置は中国漢の時代の銀象嵌を施した小ぶりのものと、どちらも歴史の深い見立て使いの逸品です。ユーラシア大陸の乾いた風がさわやかに吹き過ぎ、涼味を誘った現代硝子作家の茶器や、有名な洋画家の削った茶杓で斬新な今を教訓し、お茶の世界は時代や場所を自由に行き交って空間が広がります。

席が終ってひとときの緊張と楽しみを感謝で辞する時、大正昭和期の京都画壇を彩った橋本関雪の船鉾の絵がコンチキチンの祇園囃子を響かせて見送ってくれました。



花入	手附籠 宗全作	碌々斎箱
花	木槿・矢筈芒	
釜	瓜形羽釜 定林作	
風炉	砂張銅真形 浄味作	
水指	七宝火焰馬 惺斎箱	浄益作
棚	碌々斎 方園棚 惺斎箱	
茶器	藤田喬平作	ヴェニス手吹ガラス茶入
茶碗	樂直入作 赤平 銘 福寿海	而妙斎箱
替	仁阿弥道八作 珠光青磁	
替	永楽即全作 団子絵	
茶杓	中川一政作 煤竹 銘 八十三	
建水	青銅ルリスタン	
蓋置	漢時代 銀象嵌	
御茶	而妙斎好 縁の白	
菓子	祇園御紋団扇煎餅・生砂糖	波
干菓子器	東大寺 日の丸盆写	

点 心 席

棟方志巧作 流離抄板画卷 獅子窟の棚

一保堂詰
伊織製

以上

茶の湯をさらに楽しむ夏期講習

第1回 7月25日(土)

「唐紙のつとめ」

講師 菅原文葉(唐紙師)

推古天皇の御代、聖徳太子によって派遣された遣唐使によって、唐からの舶載品として日本に紙が持ち帰られることとなり、これが唐紙と呼ばれていた。

現在では唐紙として呼称にも変化があり、舶載ものとしてではなく、木版手刷りによって文様を装飾された紙として、主に襖障子や壁紙など建材として活躍している。浮世絵のように紙に絵具を吸わせるのではなく、紙に絵具を載せることで、立体感のある文様が特徴。馬棟を用いずに、手摺りでの繊細な作業工程が求められる伝統工芸紙である。

大倉集古館に収蔵されている『古今和歌集序』も唐紙を用いて制作されたもので、唐草や花鳥などの文様の装飾が見られ、後に国内で製造される和紙唐紙の手本とされている。

唐紙・和紙ともに、起源は後漢の時代(西暦105年)に蔡倫によって、現代の製紙技術に近いものに確立された。

西暦610年に中国の僧である曇徴が、聖徳太子によって法隆寺に滞在した際に、唐紙は日本へと伝来した。曇徴は他にも、東大寺の壁画や玉虫厨子の装飾に大きな影響を与えている。記録媒体として竹簡や木簡が基本だったが、その頃を境として紙も使用され始める。

最古の印刷として正倉院の文書には、神亀五年(西暦728年)に図所領の付属機関として紙の製造を担う「紙屋院」の記録が残っている。西暦770年には金銀箔や砂子を用いた飾紙が製造され、同年には(記録された中で)国内最古の印刷物である『百万塔陀羅尼經』も木版もしくは銅版を用いて制作された。

その後、日本国内で独自の改良が加えられ、原料は麻から楮や雁皮に変化した。腐食の製造工程を経た紙は脆かったところを、腐食ではなく煮ることで繊維を取り出し、より薄く強靱な紙の製造を可能とした。

公文書にも和紙が多く使用されるようになり、西暦901年には図所寮で2万帳もの製造記録が残っている。

平安時代には菅原道真によって遣唐使の廃止をきっかけに、天平文化から国風文化へ変化。国内での絵巻物の流行が、和紙発展に大きな影響を与えた。

十二世紀の『本願寺本三十六人家集』は最古の和紙唐紙作品例であり、孔雀宝相華唐草文や花菱・花唐草紋など舶載唐紙の文様を復刻した和製の唐紙が用いられている上で、水辺に葦・鷺・鶴図や、梅にススキ図、秋草に兎図など、我が国の風土に基づき日本人の感性に合わせて和様化された図案の作例も見受けられるようになる。

紙漉き技術の発展により量産体制が可能になると、公文書のような貴族のたしなみから、貴族の生活用品までに用途が降りてくるようになった。平安中期が舞台である『源氏物語絵巻』の絵中には襖障子が、平安後期の奈良が舞台の『春日權現験記』でも唐紙の襖が登場している。

唐紙を用いた、襖障子の古式に則った作り方には「紙継」という技術が見られる。元々が奉書紙として活用することを想定されて作られたため、唐紙が作られる基本の大きさは横に広げたもので縦36センチ横72センチが基本であったものを複数用意することで、襖障子として活用できる大きさまで継ぎ合わせる。

襖障子サイズにまでの製紙を可能としたのは明治以降の出来事だが、現在でもあえて紙継を意匠に使った例として、「桂離宮」では白と紺地の紙を継ぎ合わせた市松模様といった、遊び心のある装飾として活用されている。

襖障子として利用される中で唐紙の文様は多岐に渡り、唐紙の老舗『唐長』の保有する木版の文様だけでも六百五十

枚。生活と結びついた用途にあって、版本文様には当時の年代の文化や思想が顕著に反映されていた。

同じ時代でも建物や身分によって使われる文様や色使いは様々で、公家や武家であれば威厳や豊かさの演出のために、煌びやかな金箔銀箔での着色が好まれたが、町家では四季の風景を、胡粉や雲母といった光を和らげることで空間に広がりを持たせるといった違いがある。

あくまで主観であると前置きして、菅原先生の思う唐紙とは、空間の中で主役となるものではなく、場面ごとの営みに寄り添うもの。あえて注目しなくては気付かないもので良い、そういう紙であり続けて欲しいと語っている。

(中條高斗)



「久松勝成の茶」

—高松藩出身の松山藩主—

講師 依田 徹 (遠山記念館学芸課長)

幕末の松山藩主の久松勝成は高松藩松平家からの養子であった。そんな面白そうなお話を持ってきてくれたのは埼玉にある遠山記念館の依田徹先生です。

久松家は菅原道真が大宰府に左遷された際、道真の孫の雅規(幼名久松丸)が尾張国知多郡英比郷に流され、そこで久松殿と呼ばれたことに因んでおり、そこから久松氏と名乗ったといわれます。その後久松氏は織田信秀、信長に仕え、この間に徳川家康の生母である於大の方と婚姻します。於大の方はその後、久松俊勝との間に三男四女を儲けます。桶狭間の戦いの際に家康は母於大の方と、異兄弟にあたる三男子と対面を果たし、この時、松平氏と葵紋を授け松平家一門に准じ、これが久松松平家のはじまりとされています。このうちの四男定勝の次男定行が四国を監視する親藩として伊予松山に十五万石で加増転封され幕末まで同家が松山藩を治めました。

定行はポルトガル船が長崎に入港した際に海上警備として赴き、その際に食した南蛮菓子を好み、松山で再現させたのが松山銘菓の「タルト」だそうです。隠居した後は松山市の郊外に周囲一里を

竹垣で囲い、御殿や池泉の他に東海道五十三次を模した游路を備え、その奥に弟の定政の隠居所である吟松庵が建つ遠野御茶屋を造営しました。

松山藩四代定直は遠野御茶屋の改修に裏千家五代常叟を召し出し、三十二扶持ちで召し抱え、以後裏千家は松山藩の茶堂として明治四年まで仕えました。尻膨茶入「岩根」は常叟が定直より拝領したもので裏千家の重要な茶会で用いられています。なお別に拝領した瀬戸茶入「松根」もあります。

松山藩九代藩主は田安家出身の定国となります。さらに田安家3代斉匡の四女鑱姫が十一代定通の正室となり、田安家との繋がりが強くなっていきます。鑱姫が興入れた頃も松山藩の茶道は裏千家が行われており、裏千家が田安徳川家に出入りし始めたのも鑱姫の指導のためであったと考えられます。文政九年に行われた鑱姫が亭主の藩主定通を招いた茶会でも田安家から千家系の道具が貸し出されています。

十二代藩主の勝善は薩摩藩主、島津斉宣の十一男で天保三年、養嗣子となりました。藩主となった勝善は茶会を催すようになり、天保十四年には玄々斎より真台子の伝授を受けています。玄々斎は天保十年の利休二百五十年忌のために裏千家に大規模な改築を施し、この時に稽古の間が造営されました。その際に勝善より下賜された松山城中の蔦の太木が床框に用いられ、その余材から玄々斎の好

む「蔦棗」が作られたそうです。このうち玄々斎は四十人扶持から二百石に大幅な加増を受けていますが、これは紀州藩、表千家の二百石に合わせたのではないかとされています。

愛媛大学図書館の「御上屋敷懐石附」には弘化二年から嘉永四年までの六年間で松山藩関係の茶会が四十回記録されており、この中でも貞寿院と並んで勝善の茶会が多数含まれており、その茶人ぶりがうかがわれます。

嘉永三年、愛宕山の松山藩上屋敷が火災で焼失、その際に焼失した茶室「楽玩亭」の席開きには小浜藩主の酒井忠義らとともに彦根藩主の井伊直弼も招いていたとの記録があるそうです。

弘化四年、讃岐高松藩九代頼恕の三男勝成が松山藩の養子となりました。三田にあった松山藩中屋敷で生活していた勝成は同年に愛宕下にあった上屋敷に招かれ勝成を正客とする茶事が催されました。これは松山藩の家族のきずなを深める茶会であったと考えられます。嘉永六年には初御国入りをし、十一月二十日から重臣や菩提寺の住職などがまねかれた茶事が七日間にわたり行われました。これは玄々斎による若殿お披露目のための舞台であったと考えられています。

安政三年、勝善が亡くなり、勝成が第十三代松山藩藩主となりました。しかしその後松山藩の茶の記録は見られなくなっています。

慶應四年に鳥羽伏見の戦いが起こり、

太政官布告により源姓松平氏と葵紋を返上、菅原久松氏に復姓いたしました。明治二年には松山藩知事となり二年勤めて隠居し、明治十五年頃には東京愛宕山の近くの飯倉片山に別邸を構えます。

明治十八年に裏千家の業躰、中田宗閑(松陰庵)に入門し、還暦直前の明治二三年には此処で茶事をしています。翌二四年に十四代家元となった円能斎が東京に移住。同じ頃に久松家に「寒雲亭」の写しが造られ、裏千家より狩野探幽の「手違襖」が献上されました。

明治三二年頃、東京の茶人一六名で順会の茶会を行う「和敬会」という集まりが発足し、その多彩な顔ぶれに高橋箒庵により「十六羅漢会」とも呼ばれていました。『古今茶湯集』によると勝成の茶会は四回あったそうです。

そして、明治四四年、勝成八十歳の年賀につき、真台子の引き渡しが行われました。その祝賀茶会では、家宝の名器「雲山肩衝」と夕顔台子が披露され、水屋には円能斎が詰められました。

勝成は翌四五年に亡くなり、東京三田済海寺に葬られ、同年七月には「和敬会」のメンバーによる「九羅漢追福献茶会」が寛永寺の慈眼堂に於いて催されています。

(香川二郎)



▶ 茶華道ガイド 急遽中止等の変更となる場合があります。

表千家同門会香川県支部 TEL 087-845-4638

11/8 東讃 四季茶会 席主：柴田宗翠
大西・アオイ記念館 1,000円 9:00～15:00

琴平月釜茶道会 TEL 090-3460-9195

10/10 金比羅例大祭奉納茶会
席主：官休庵(田中、山下、竹井)
アクトことひら 500円 10:00～15:00

12/5～6 琴平町歳末チャリティー茶会
席主：煎茶・静風流(金丸社中)
総合センター1階大広間
500円 10:00～15:30(6日は15:00まで)

茶道裏千家淡交会香川支部 TEL 0877-62-4155

9/27 月釜 席主：柳原宗巴
茶芸館夢回廊 800円 10:00～14:00

9/27 観月茶会 席主：多度津分会
地域交流センター 500円 15:00～19:00

10/4 茶筌供養 席主：善通寺教授者
善通寺 800円 10:00～14:00

10/12 月釜 席主：観音寺教授者
観音寺働く婦人の家 800円 10:00～14:00

11/3 文化の茶会 席主：唐渡宗誉
翠松閣 800円 9:30～14:00

11/7 綾歌ふるさと祭り茶会 席主：綾歌教授者
アイレックス 500円 9:00～15:00

11/8 月釜 席主：円羽宗恵
多度津町地域交流センター 800円 9:30～15:00

11/8 丸亀文化祭芸術祭茶会 席主：丸亀分会
シアターマド 800円 10:00～15:00

11/22 月釜 席主：東條宗洋
総本山善通寺 800円 9:00～14:00

茶道裏千家淡交会高松支部 TEL 087-841-0605

9/27 秋季茶会(主催：香川県茶道協会)
第一席 席主：淡交会高松支部 今井宗喜
玉藻公園披雲閣 檜の間
2,000円(第2席と合わせて) 9:00～15:00

〈高松支部月釜〉 大西・アオイ記念館
1,000円 9:30～15:00(時間指定)

9/6 席主：高松青年部

10/4 席主：岩倉宗睦

11/1 席主：高橋宗久

石州流讃岐清水派石州会 TEL 090-2826-9229

10/18 流祖宗関公354年祭 記念茶会
席主：里野宗絹、多田宗千、中浦宗志
玉藻公園披雲閣 1,000円 9:00～15:00

煎茶道三癸亭賣茶流高松仙友会 TEL 087-898-3655

9/27 香川県茶道協会 秋季茶会 第二席 席主：植田弘子
玉藻公園披雲閣 蘇鉄の間
(第一席 檜の間 茶道裏千家淡交会高松支部)
2,000円 9:00～15:00

11/15 由佐城月釜茶会 席主：森澤桂子
高松市香南歴史民俗郷土館 第2研修室
前売券900円・当日券1,000円 9:30～14:30

東讃茶道懇親会 TEL 087-898-0391

12/13 月釜 席主：石州流 山崎可寿子
池戸西徳寺 1,000円 9:00～15:30

美笑正流 TEL 090-7576-2186

11/8 美笑正流 華展
高松市川東コミュニティセンター 無料 9:00～15:00

武者小路千家香川官休会 TEL 087-862-8574

11/29 香川官休大会
玉藻公園披雲閣 2,000円 9:00～15:00
〈香川官休会月釜〉 無量寿院 1,000円 9:00～15:00
9/6 席主：竹井守恵
11/1 席主：溝渕守保

大西・アオイ記念財団 TEL 087-880-7888

9/13 10周年記念 2026年度文化講演会「茶と大徳寺」
講師：大本山大徳寺別院徳禅寺特命住職 橘宗義
サンメッセ香川2階大会議室 1,500円 12:30～13:50
9/13 10周年記念 茶会 席主：裏千家淡交会高松支部
大西・アオイ記念館 1,000円 9:00～15:50
12/13 大西・アオイ高校茶会 席主：高松高校茶華道部
大西・アオイ記念館 400円 10:00～14:30

高松市香南歴史民俗郷土館 TEL 087-879-0717

〈由佐城月釜茶会〉 第2研修室(和室)
前売券900円・当日券1,000円 9:30～14:30
9/20 席主：土居宗綾、真子宗博(表千家 真子宗博社中)
10/18 席主：秋山宗亜(茶道石州流宗家高松会 綾野宗悦社中)
11/15 席主：森澤桂子(煎茶道三癸亭賣茶流)

おいでまい香川

香川県内の様々なイベント情報を随時更新中!

<https://oidemai.kagawa.jp/>



どら焼きもトレビアン

アルプス山脈の最高峰「モンブラン(白い山)」の雪をかぶった美しい姿。そんな雄大な山容をかたどった人気のケーキをドラえものの大好物「どら焼き」で大胆に挟んでみました。

みりんや蜂蜜を練り込み、ふんわり・しっとり焼き上げたどら焼きの生地。その中には栗の豊かな風味を活かしたペーストと、丁寧に炊き上げた粒あんが繊りなす『モンブランどら焼き』。

和菓子の伝統的な骨格を持ちながら、洋菓子の華やかさを併せ持つモダンな一品です。

深蒸し煎茶と合わせると濃厚な栗とあんこの甘みを、煎茶の心地よい旨みが受け止め、口の中をすっきりとリセットしてくれます。

ほうじ茶・和紅茶を合わせると、栗が持つ特有の「香ばしさ」と同調し秋の深まりを感じさせる奥行きのあるマリージュが完成。

また、和菓子の優しさと洋菓子のコクを併せ持つこの一品は珈琲の芳醇な苦味やフルーティーな酸味とも絶妙な相性です。

合わせる飲み物によって異なる表情を見せてくれる、そんなスイーツをいかがですか。



お茶の風景(33)

朝顔の花

山上憶良は秋の野に咲く七種の花を「萩の花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花、また藤袴、朝顔の花」と万葉集に詠みました。句読点や漢字を現代風にして

花のイメージを重ねやすくなりましたが、この朝顔は、研究者の学説によると桔梗の花というのが定説らしいです。

朝顔と言えば、江戸時代の久須見疎庵の茶話指月集に「利休あさかほの茶湯」の逸話があります。宗易(利休)の庭に朝顔が見事に咲いていると太閤(秀吉)に申し上げる人がいて、所望がかかり朝茶にお招きする段取りとなりました。

まだあけしらぬ夏の早朝、屋敷の垣根はさぞかしと意気込んで来たのに庭には一枝花もなく、興さめの面持ちで茶室に入ると、色鮮やかな一輪の朝顔が床に生けられていました。太閤はじめ従者たち一同目の覚める思い、大層なご褒美に預かったと言います。

利休の美の演出の見事さを如実に語る有名な下りながら、ふと、摘まれた花の残酷な一面を感じたりしました。



財団行事予定

(9月～11月) 休館日水曜日

お申込みは財団まで。急遽中止になる事もあります。

和菓子講座はしばらくお休みいたします。

9月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
9月1日(火)午前11時
- ◆ 書道教室 森本義人先生
毎月第1・第3金曜日
9月4日・18日(金)午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生
9月12日・26日(土)午後1時～
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
9月15日(火)午前10時～午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。(お弁当は予約制)
- ◆ 9月月釜 五人様茶会
※ご好評につき満席となりました
日時 9月27日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 表千家流 土井宗友
薄茶 表千家流 岩瀬宗由
点心 表千家流 土井宗美
会費 10,000円(濃茶・薄茶・点心席)

10月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
10月2日・16日(金)午前10時～12時
- ◆ 財団賞授賞式・
助成金交付団体認定書授与式
10月5日(月)午前10時30分～
- ◆ 晴友会研修旅行
10月9日(金)～10日(土)
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
10月10日・24日(土)午後1時～
- ◆ 10月月釜 五人様茶会
「清秋の候 名残を惜しむ一服のお茶を差し上げます」と席主のメッセージを添えてご案内いたします。
日時 10月11日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 武者小路千家 小池妙公
薄茶 武者小路千家 牛熊圭介
会費 10,000円(濃茶・薄茶・点心席)
入席時間(各席6名・2時間15分を予定)
第1席 9時 第2席 10時30分
第3席 11時15分 第4席 12時45分
(各席A席・B席)
申込 電話受付 9月7日(月)10時～

◆ 月に一度の喫茶室

10月20日(火)午前10時～午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。(お弁当は予約制)

11月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
11月3日(火)午前11時
- ◆ 書道教室 森本義人先生
11月6日・20日(金)午前10時～12時
- ◆ 11月月釜 五人様茶会
「炉開きの喜びをご一緒に 楽しみにしています」と席主のメッセージを添えてご案内いたします。
日時 11月8日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 裏千家 山本宗佳
薄茶 裏千家 久保宗佳
会費 10,000円(濃茶・薄茶・点心席)
入席時間 10月五人様茶会と同様
申込 電話受付 9月28日(月)10時～
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
11月14日・28日(土)午後1時～
- ◆ 月に一度の喫茶室
11月17日(火)午前10時～午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。(お弁当は予約制)

令和8年度 第34回財団賞決定

今年度の財団賞は、次の2件に決定いたしました。

宇多津鹿島踊り保存会

(宇多津町教育委員会推薦)

「鹿島踊り」は、江戸時代初め(1655年 明暦元年)讃岐の国で大災害が続き人力ではどうにも復旧できないと、当時の高松藩主 松平頼重公が、先の領国(常陸の国 茨城県)の鹿島神宮の神の力で平らげようと、全村々で踊られた。高松藩の西の端である宇多津から兇神を御幣に集めて次の村へ送る。この仕掛けられた形式を「掛け踊り」と言い、珍しい踊りである。平成27年5月に町内有志により保存会を設立し、保存・継承活動をされています。

桑島和茂

(丸亀市教育委員会推薦)

定年退職後、約20年以上に渡り、埋蔵文化財発掘調査作業員として県内各地の発掘調査に携わる傍ら、飯山南地区内に鎮座する讃留霊王神社及び同神社の御神体である讃留霊王古墳、奈良時代創建で地域の古刹である法勤寺を中心に地域の歴史や文化財に関する調査・研究、普及・啓発をライフワークとしている。さらに、自費によるパンフレットの製作、コミュニティ誌に寄稿するなど、研究成果を広く発信されています。

助成金のチャンスが広がります

弊財団の助成金は、平成5年の設立時より始まり、33年に渡って、讃岐の文化発展を応援させていただきました。

公益財団法人と言うのは、一定の資産を運用しながら公益のために貢献していく法人で、国の管理下にありません。独立採算で運営していくためには、活動にご賛同下さる多くの方の知恵とご協力をいただいております。

仕事の基本は、平成9年に席披きをした茶室「美藻庵・晴松亭」を本格的な茶席などの場として、多くの皆様にご利用いただくためにきちんと維持管理をしていく事です。

茶の湯は基本的には趣味の世界ですが、同時に日本の文化や美意識を伝えられる要素を幅広く持っている文化だと思います。それと、設立当初からある財団賞の選定と助成金の支給事業が2本の柱です。

それらを支えるために資産運用を安定させる事も、大事な仕事です。この30有余年日本の経済は不安定な事も多く、運用成績を安定させるのは大変でしたが、基本財

産に新たな寄付を頂いたりした事もあって、近年はかなり安定して参りました。

財団を設立した故中條晴夫は、郷土の歴史や文化を大事にして誇りを持って世界に羽ばたいて欲しいと願っておりまして。

中でも助成金は、当初から新たな文化事業の創設とか、既成の文化でも新たなチャレンジをしたいといった人達を応援していきたいという意識で運営しております。

これまでは、1事業30万円を限度として3団体に交付されて来ましたが、その基本は守りつつ、この度令和9年度の助成金から、新たに助成金の増額が出来るように規定を変更いたしました。

この増額分については、毎期の投資の運用成績にもありますが、より限度額の高い助成金が出せるようにと、理事会で決定致しましたのでご報告致します。

詳しくはホームページをご覧ください、より多くの皆様にご申請いただきますようお願い致します。

なお、新たな助成金につきましては、令和9年度分の申請から対象とさせていただきます。

編集後記

熊本県八代市の一市民の家に何代にも受け継がれ大切にされていた茶室があり、その歴史的価値が認められ重要建築物の指定を受け、畳・障子等の手入れをしていました。そこに今回の震度6強の地震があり、屋根付き門も茶室の屋根もくずれ落ちました。十年前の地震には耐えられましたが今回は無残な姿になりました。幸いにも崩れた茶室の瓦礫の中から茶釜が無傷で見つかり、母屋に持ち帰る様子が放映され、胸が震えました。

生活インフラの復旧が最優先で取り組まれています。市井にある歴史的建造物等の再建にも手を差し伸べて欲しいと願っています。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017

高松市番町二丁目一十二

公益財団法人 中條文化振興財団 編集部

TEL (087) 826-1335

FAX (087) 826-2212

info@chujo-zaidan.or.jp